第７節　「うまキッズ探検隊」を企画し，子どもに馬の魅力を与えるイベントを実施

Ⅶ－１　乗馬療育

１　目　　的

(1) ねらい　乗馬指導者としての課題について理解し，適切な指標を確立できるよう指導する。

(2) 身に付けさせたい資質・能力　　◎思考力　○表現力

２　授業内容・研修内容

(1) 期　日　４月28日(木)

(2) 会　場　視聴覚室・厩舎

(3) 参加者　生産科学科３学年13名，生産科学科２学年17名

(4) 講　師　北里大学　獣医学部　准教授　松浦　晶央　様

(5) 概　要　乗馬介在療法や安全な乗馬について学習し，その後，乗馬療法を実施する意義を写真59のように学習した。また，実際に馬を使用し，安全に乗馬を行う際の配置や役割について学習した。

３　生徒の感想

(1) アニマルセラピーには３つの方法と目的があることを知りました。実際に私たちが授業や研究班で実施する際は，どの目的で行うかを明確にしたいと思いました。

(2) 馬が人間に良い影響を与えていることが数値化されていて驚きました。授業でも心拍数を測定し，データとして残していきたいです。

(3) 実際に乗馬療育を行う時は，リーダー，介助者がしっかりと連携をとることが大切だと実習をとおして実感しました。

４　成　　果

(1) 乗馬療育や乗馬管理技術を体系的，系統的に生徒に理解させることができた。

(2) 今後，授業で行う乗馬療育や体験乗馬に向けて，安全性に留意した乗馬方法など，生徒の実践力を向上させることができた。

(3) 乗馬経験の浅い騎乗者の指導をすることで，生徒自らの乗馬学習の振り返りとなり，生徒に深く理解させることができた。

５　課　　題

(1) 普段の学習で行う乗馬療育や体験乗馬で講師の方に指導していただき，より安全で科学的な乗馬療育を実施する必要がある。

(2) 今回の講義で触れた内容を普段の学習で行う乗馬療育や体験乗馬に生かすために，乗馬に科学性を取り入れて実施する必要がある。

(3) 安全性に留意した乗馬療育を実施するために，安全対策のなされた環境，道具の選定を検討する必要がある。

写真59　「乗馬療育」の授業の様子

Ⅶ－２　ひだかうまキッズ探検隊2022

１　目　　的

(1) ねらい　地域の小学生が馬と触れ合うことで，小学生の馬への関心と愛着を醸成するイベントを企画し，日頃の授業で身に付けた知識・技術を小学生に教えることで，生徒の指導性の向上を図る。

(2) 身に付けさせたい資質・能力　　◎思考力　○表現力

２　授業内容・研修内容

(1) 期　日　10月29日(土)

(2) 会　場　厩舎周辺

(3) 参加者　生産科学科３学年13名，生産科学科２学年16名

(4) 講　師　新ひだか町教育委員会　様
一般社団法人umanowa　糸井　いくみ　様

(5) 概　要　乗馬介在療法や安全な乗馬についての学習をもとに，地域の小学生に馬の魅力を伝えるイベントを企画し，馬の授業，乗馬供覧，乗馬交流や手入れを写真60のように実践した。

３　生徒の感想

(1) 私たちが学校で学習した知識や経験を子どもたちに，楽しく伝えることができて良かったです。後日子ども一人ひとりからイラスト付きの手紙をいただき，やりがいを感じました。

(2) 乗馬交流や手入れを安全に取り組めて安心しました。しかし学校には，大人用の鐙しかないため，子ども達がより安全に楽しく乗馬ができる工夫をしていきたいです。

(3) 今回，参加してくれた子ども達がこの企画をきっかけに馬の世界に進んでくれたらとても嬉しい。やってきた意味があると感じました。

４　成　　果

(1) 交流をとおして，馬の魅力発信や乗馬管理技術を体系的，系統的に生徒に理解させることができた。

(2) 事前に安全性に留意した乗馬を学習したことで，生徒の表現力や実践力を向上させることができた。

(3) 馬を介在として，子どもたちと交流を企画し実施したことで，生徒の指導性を向上させることができた。

５　課　　題

(1) 普段の学習で行う乗馬療育でも講師の方についていただき，より安全で科学的な乗馬療育を実施する必要がある。

(2) 例年参加した小学生が今後，馬に携わるようになるかを関係機関と連携し，長期にわたり調査する必要がある。

(3) 安全性に留意した乗馬交流を実施するために，安全対策のなされた環境，道具の選定を検討する必要がある。

写真60　「ひだかうまキッズ探検隊2022」の授業の様子

第８節　産業界等と連携した食品に関する新たな商品開発・販売の基礎研究

Ⅷ－１　食品加工

１　目　　的

(1) ねらい　農業生産，食品製造から流通，消費までの流れについて取り上げ，食料供給の仕組みを理解できるよう指導する。

(2) 身に付けさせたい資質・能力　　◎思考力　○創造力

２　授業内容・研修内容

(1) 期　日　７月12日(火)

(2) 会　場　北海道静内農業高等学校　視聴覚室

(3) 参加者　食品科学科１学年21名

(4) 講　師　カゴメ株式会社 北海道支店営業２グループ長　河野 崇　様
　　カゴメ株式会社 北海道支店営業推進グループ　竹本 莉奈　様

(5) 概　要　カゴメ株式会社で取り組む実践事例や商品，マーケティング方法について，写真61のように学習した。企業が行う食品加工の実態を知り，静内農業高校で学習する食品製造の食品加工分野における思考力や創造力を高めるよう学習を行った。

３　生徒の感想

(1) 自分は野菜を取っていると思っても，あまり野菜を取ることができていないことが分かったので，これからは野菜ジュースなどを用いて取ろうと思った。

(2) 野菜ジュースは，外食店や惣菜店にも需要があることを学習できた。

(3) カゴメ株式会社の歴史は長く，日本人の健康にとても貢献していることがわかった。

４　成　　果

(1) 野菜の摂取量を確認するアプリを活用して，自分が摂取する野菜量を生徒に確認させ，一日の野菜摂取量基準を生徒に理解させることができた。

(2) 本校で生産したトマトジュースの販売に向けて，ＰＲするために必要な知識を生徒に身に付けさせることができた。

(3) 中規模・大規模の食品工場では，食品製造がどのように行われているのか生徒に理解させることができた。

５　課　　題

(1) １日の野菜摂取量の学びを生徒が今後行う商品開発の授業に繋げられるよう，応用の機会を設ける必要がある。

(2) 生徒が生産しているトマトジュースの栄養分析を行う等，食品化学の授業で科学的に野菜摂取量が分かるよう授業計画を立てる必要がある。

(3) 実際に企業が行う食品加工の様子を生徒が一層学ぶことが出来るようにするため，実際の食品加工現場等の動画を生徒に見せる機会を確保する必要がある。

写真61　「食品加工」の授業の様子

Ⅷ－２　商品のトレンドと発想

１　目　　的

(1) ねらい　加工食品のトレンドを踏まえた商品アイディアを出すための方法を学び，開発する商品の企画を立てることができるよう指導する。

(2) 身に付けさせたい資質・能力　　◎創造力　○思考力

２　授業内容・研修内容

(1) 期　日　６月23日(木)

(2) 会　場　北海道静内農業高等学校　体育館

(3) 参加者　食品科学科２学年17名，食品科科学科３学年24名

(4) 講　師　生活協同組合コープさっぽろ　執行役員商品本部副本部長　鈴木　裕子　様

(5) 概　要　商品を開発するために必要な商品企画段階のアイディアの出し方について学習するとともに，商品開発を実践的・創造的に行うことができるよう，コープさっぽろ様が実際に行うトヨヒコプリン等の商品開発事例について，写真62のように学習した。また，これから商品開発Ⅰ・Ⅱの授業で行う商品開発に関わるアドバイスを頂いた。

３　２学年の感想

(1) これから行う商品開発を，専門誌等を使って開発を進めたいと思いました。

(2) 積極的に突き進む姿勢は，将来何にでも活かせる力だと感じました。

(3) 商品開発をする上で，他の商品と差別化することは販売時に有利になると思いました。

４　３学年の感想

(1) 商品作りをする上で必要なことは差別化をすることであり，その差別化をする上で最先端のことを学んでいく必要があることを学習できました。

(2) 商品を販売するには，３桁の価格の壁があり，２円の差で売り上げが２～５倍も変化することを学習できました。

(3) 商品開発を行っていくためには常に新しいものを考え，とにかく作り，失敗して改善していくことが重要であると学習できました。

５　成　　果

(1) 商品開発をするためには，消費者のニーズを捉えるだけではなく，商品の差別化を図り，企画を立てていく必要があることを生徒に理解させることができた。

(2) コープさっぽろ様の実際の商品開発事例を学習させることで，商品開発の流れについて生徒に理解させることができた。

(3) 現在の商品開発のトレンド等について学習させることで，時代に応じた商品開発をするために必要な知識を生徒に理解させることができた。

６　課　　題

(1) 座学中心に授業を行って頂いたため，次年度は生徒に動きがある演習活動を導入し，生徒の実践力を高める必要がある。

(2) 生徒が行っている商品開発を発展的にするため，生徒が開発する商品等を題材とした授業を行う必要がある。

(3) 実際に企業が行う商品発想や会議などの様子を生徒が学ぶことが出来るよう，動画など企業の様子を授業に取り入れて，授業内容の改善と充実を図る必要がある。

写真62　「商品のトレンドと発想」の授業の様子

Ⅷ－３　価格の設定

１　目　　的

(1) ねらい　卸値を踏まえた小売価格の設定手法を学び，実際に商品価格を設定できるようにする。
(2) 身に付けさせたい資質・能力　　◎判断力　○実践力

２　授業内容・研修内容

(1) 期　日　９月２日(金)
(2) 会　場　北海道静内農業高等学校　体育館
(3) 参加者　食品科学科２学年17名，食品科学科３学年24名
(4) 講　師　生活協同組合コープさっぽろ商品本部デリカ部開発チーフ　新山　佑奈　様
(5) 概　要　商品を販売するために必要な価格設定について理解を深めるとともに，コープさっぽろ様の実際の商品事例をもとに利益率や原価率について写真63のように学習した。

３　２学年の感想

(1) 今開発している商品の価格設定をする上で，役立つと思った。
(2) 学校での活動の中で，自分達の商品もリピートして貰えるように商品改善が必要だと思った。
(3) 数字や根拠を元にすることも大事だが，実際に見て開発することも大切であることを理解できた。

４　３学年の感想

(1) 28円の差で，通常の40倍の売り上げになった商品もあることを学び，価格設定の大切さを理解することができました。
(2) ＰＯＰでその商品のストーリーを伝えると，販売額に変化がでることを学ぶことができました。
(3) 赤・黄・緑の３食をイメージして，彩りを考えた商品開発をすることが大切であると学びました。

５　成　　果

(1) 「商品開発Ⅰ」や「商品開発Ⅱ」,「課題研究」で開発した商品の価格を設定する上で，必要な知識を生徒に身に付けさせることができた。
(2) １円単位の商品価格の差について学習し，今後の商品の価格設定方法を生徒に理解させることができた。
(3) 商品開発を行っている企業の価格設定の進め方について，生徒に理解させることができた。

６　課　　題

(1) 実際に開発している商品の価格設定ができるよう，本校の既存製品を用いた価格設定の演習等を取り入れる必要がある。
(2) より安価な商品を開発するために必要な知識を生徒に身に付けさせるため，店舗毎の原材料の価格帯をテーマにした授業を取り入れる必要がある。
(3) 食品群別に利益率が違うことを生徒に理解させるため，次年度はコープさっぽろ様の食品部門別の価格設定について指導頂き，学習の充実を図る必要がある。

写真63　「価格の設定」の授業の様子

Ⅷ－４　販売促進

１　目　　的

(1) ねらい　小売業が実際に行う販売促進の方法を学び，消費者の購買の動機付け方法について考察できるよう指導する。

(2) 身に付けさせたい資質・能力　　◎思考力　○判断力

２　授業内容・研修内容

(1) 期　日　10月13日(木)

(2) 会　場　北海道静内農業高等学校　体育館

(3) 参加者　食品科学科２学年17名，食品科学科３学年24名

(4) 講　師　生活協同組合コープさっぽろ　店舗本部マーケティング部部長　川崎　正隆　様

(5) 概　要　商品を販売するために必要なマーケティング方法について写真64のように学習した。また、消費者の購買意欲を喚起する方法の必要性と大切さについて学習した。

３　２学年の感想

(1) マーケティングについて詳しく知ることができ，売れる商品，売れない商品のことについても深く知ることが出来ました。

(2) 商品を売るときや開発するときは自分目線ではなく，お客様視点が大切だと学びました。

(3) 売る商品は作るだけではなくその商品の良さを伝えていかないといけないことを学習できました。

４　３学年の感想

(1) どんなに良い商品でも黙っていては，商品の良さは伝わらないことを学習できました。

(2) 商品で中身が見えない時に，ＰＯＰ等を用いて中身の写真をつけることは有効な手段であることを学習できました。

(3) たくさんの量を売り場に出すだけで，売り上げは変化することを学ぶことができました。

５　成　　果

(1) 商品を販売するためには製造するだけではなく商品の価値観をどのように伝えていくか，考える必要があることを生徒に理解させることができた。

(2) 商品開発を行う上で，消費者がどのようなことを商品に求めているのか，生徒に考察させることができた。

(3) マーケティング方法に関するグループ学習をとおして，商品開発に対する互いの意見を交換したことで，生徒の学習を深化させることができた。

６　課　　題

(1) マーケティングに関する演習時間が長くなり最後まで内容を進めることができなかったため，次年度は商品の魅力を伝える方法などの要点に絞り生徒に学習させる必要がある。

(2) 商品開発や課題研究で開発している商品のマーケティング方法について知識を深めさせるため，次年度は各研究班で開発している商品をテーマに取り組ませる必要がある。

(3) より専門的な学びを行うため，次年度はマーケティングにおける基礎的な知識を生徒に事前に習得させ，発展的な内容を多く取り入れる必要がある。

写真64　「販売促進」の授業の様子

Ⅷ－５　【新商品コンペ】目指せ！我が町の「特産品」～地域で共創する商品開発～

１　目　　的

(1) ねらい　高校生発案の加工品コンペ会を中小企業を対象に開催し，地域が求める商品を理解するよう指導する。

(2) 身に付けさせたい資質・能力　　◎表現力　○判断力

２　授業内容・研修内容

(1) 期　日　12月９日(金)

(2) 会　場　北海道静内農業高等学校　体育館

(3) 参加者　食品科学科２学年17名，食品科学科３学年24名

(4) 講　師　生活協同組合コープさっぽろ　商品本部　デリカ部部長　岩本　秀文　様
生活協同組合コープさっぽろ　デジタル推進本部広報部部長　緒方　恵美　様
生活協同組合コープさっぽろ　商品本部デリカ部バイヤー　徳永　隆太　様

生活協同組合コープさっぽろ　デリカ部商品開発マネージャー　深川久美子　様
生活協同組合コープさっぽろ　デリカ部商品開発チーフ　　新山　佑奈　様

(5) 概　要　道内有数のスーパーであるコープさっぽろのデリカ部門で商品を取り扱って頂くため，１年間掛けて開発してきた商品を生徒がプレゼンテーションをとおして写真65のように発表した。その内容についてコープさっぽろの社員５名に評価を頂き，評価内容をとおして地域産業や小売業について理解を深め，地域が求める商品について必要な知識を学習した。

３　２学年の感想

(1) 自分達の商品だけではなく，他の班の商品やプレゼンを見て，とても勉強になったし，参考になる内容ばかりで今後も頑張ろうと思いました。
(2) 開発したものをさらに活用し，原価など色々な普段詳しく調べていないところまで学べて知識や技術の向上に繋がったと感じました。
(3) 商品のプレゼンの際,相手に伝えるべきことを明確にして伝えることが大切だと学ぶことが出来ました。

４　３学年の感想

(1) コープさっぽろ様の質問を沢山聞くことができ，何が良くて何が良いのか，しっかりと分かるような質問ばかりで，これからどうするべきなのか，何をすべきなのか分かった気がします。
(2) 様々な視点のアドバイスや意見を頂くことが出来て，将来に繋がる良い勉強になりました。
(3) 自分達の商品のアピールポイントを明確にして，商品を販売することの大切さを今回のコンペ会をとおして，理解できたような気がしました。

５　成　　果

(1) 開発した商品を用いた加工品を考案し試作させることにより，３次加工品を販売することの意義を生徒に考えさせることができた。
(2) 地域で商品を取り扱うためには，地域や製造業者が販売できる視点を踏まえ開発していくことが重要であることを生徒に理解させることができた。
(3) 売れる商品を開発するためには，美味しさはもちろんのこと，市場を分析し計画して商品を開発していくこと等が重要であることを生徒に理解させることができた。

６　課　　題

(1) コープさっぽろ様と生徒が関わる時間を発表以外に計画していなかったため，コミュニケーションや評価を生徒一人一人が聞くことができる時間を確保する必要がある。
(2) 今年度は初の取組として２～３学年合同で授業を実施してきたため，次年度以降は生徒の学びが重複しないようカリキュラムを調整する必要がある。
(3) 企業が実践する価格設定方法について生徒が学習する時間が少なかったため，次年度以降は生徒一人一人が実践的な価格設定ができるよう，商品開発の授業の中での時間を確保していく必要がある。

写真65　「【新商品コンペ】目指せ！我が町の「特産品」～地域で共創する商品開発～」の授業の様子

Ⅷ－６　商品開発

１　目　　的

(1) ねらい　学校での学習活動に有機的につなげるため，外部機関で実践する食品流通の実態を把握するとともに，今後の食品流通・マーケティングの在り方を考察できるよう指導する。
(2) 身に付けさせたい資質・能力　　◎想像力　○思考力

２　授業内容・研修内容

(1) 期　日　12月７日(水)
(2) 会　場　北海道静内農業高等学校　視聴覚室
(3) 参加者　食品科学科１学年21名
(4) 講　師　国分北海道株式会社地域共創部　商品共創課長　　石田　健二　様
国分北海道株式会社地域共創部　商品共創課グループ長　田口　静恵　様
(5) 概　要　食品開発のプロセスを企業が行った商品開発に照らし合わせ写真66のように学習するとともに，商品開発における基本的なマーケティング手法のＳＴＰ分析や，ブルーオーシャン戦略，戦略的ＢＡＳＩＣＳについて写真66のように学習した。演習ではグループ毎に地元の食材を使用した商品開発案の立案を戦略的ＢＡＳＩＣＳに照らし合わせ学習を行った。

３　生徒の感想

(1) 来年の研究班活動で行う商品開発に生かせる知識を身に付けることができました。商品開発を行う際は戦略的ＢＡＳＩＣＳを活用したいと思いました。

(2) 国分北海道様の商品を実際に試食するとともに，その商品ができたストーリーを聞き，商品開発の楽しさややりがいがわかりました。国分北海道様の商品のサクリチーズのファンになりました。

(3) 私は将来，食に携わる職業に就きたいと思っています。最後にお話された商品開発に求められる能力・スキルの中で一番大切な要素は，人生を楽しめる人と言うことを聞き，これからの学校生活でも意識し，何事にも前向きにチャレンジしてみようと思いました。

４　成　　果

(1) 企業が行った商品開発の事例を，企画フェーズ・調整フェーズ・実行フェーズ・検証フェーズに沿って学習したことで，商品開発のプロセスを生徒に身に付けさせることができた。

(2) ＳＴＰ分析，ブルーオーシャン戦略，戦略的ＢＡＳＩＣＳといった，企業が商品開発時に行うマーケティング手法について，生徒が実践的に学習を行うことができた。

(3) 地域資源を活用した商品開発の演習を行ったことで，地域資源の魅力や活用方法，効果的なマーケティング手法について生徒に理解させることができた。

５　課　　題

(1) 今後の研究班活動及び商品開発時に，今回学んだ戦略的ＢＡＳＩＣＳ等のマーケティング手法を取り入れ，生徒が商品の企画・調整・実行・検証を行えるよう指導する必要がある。

(2) 地域資源を生かした商品開発を行うためには地域を知ることが重要であるため，地域関係団体との協力体制を強化するとともに，地域の魅力や課題を生徒が学習できる機会を設けていく必要がある

(3) 商品開発に関する知識を深化させるため，生徒が取り組んできた商品開発のプロセスやマーケティング戦略を実際に企業の方に評価していただく機会を設けていく必要がある。

写真66　「商品開発」の授業の様子

Ⅷ－７　新ひだか町の特産品と特産品作りの考え方

１　目　　的

(1) ねらい　地域農業の実態や特色などに応じて，適切な題材を選定することができるよう指導する。

(2) 身に付けさせたい資質・能力　　◎表現力　○思考力

２　授業内容・研修内容

(1) 期　日　５月23日(月)

(2) 会　場　北海道静内農業高等学校　体育館

(3) 参加者　食品科学科２学年17名，食品科学科３学年24名

(4) 講　師　株式会社ＴＡＩＳＨＩ　ディレクター　嶋田　健一　様

(5) 概　要　地域農産物を活用した商品開発を行うために地域の農業や食品産業について写真67のように学習した。また，グループ学習をとおして今後活用する地域素材について選定した。

３　２学年の感想

(1) 今年から授業に入ってきた商品開発の授業を，これから一生懸命頑張ろうと思いました。

(2) 新ひだか町に暮らしているのに知らなかった地域の魅力が沢山知れてとても勉強になりました。

(3) グループワークをとおして，他の人の意見を知ることができて良かったです。

３　３学年の感想

(1) ３年生は３グループに分かれ商品開発を行っていく予定なので，それぞれの分野で良い商品が出来るように頑張りたいと思いました。

(2) 地域の食関連産業の方々も，地域のために頑張ろうとしていること学習できました。

(3) 当たり前にある地域素材が，商品開発をする上で使用できることはとても嬉しく思いました。

４　成　　果

(1) 地域農産物や地域の事業者を学習させることで，今後どのように商品を開発していけば良いか，生徒に考えさせることができた。

(2) 地域農産物の魅力を知り，地域農産物を活用していくことを題材としたことで，地域の魅力を生徒に理解させることができた。

(3) グループワークをとおして他者と意見交換をしたことで，特産品づくりに必要な地域素材を生徒に考察させることができた。

５　課　　題

(1) 特産品にはどのような商品があるか知識を深めるため，商品開発を行う他校との情報交換や北海道が公開している市町村特産品リスト等をもとに学習させる必要がある。

(2) 商品開発の授業を進める上で，生徒が地域の農産物や事業者を知る機会を４月～５月上旬に設ける必要がある。

(3) 地域の消費者や観光客はどのような購買心理を持ち特産品を求めているのか生徒に学習させるため，アンケートデータを集計し指導していく必要がある。

写真67　「新ひだか町の特産品と特産品作りの考え方」の授業の様子

Ⅷ－８　試作品の評価と試食会

１　目　　的

(1) ねらい　開発してきた特産品の試食会をとおして，顧客の求めている価値やニーズ，消費動向を踏まえた特産品開発ができているか考察・分析し，主体的な特産品開発を展開することができるよう指導する。

(2) 身に付けさせたい資質・能力　　◎判断力　○表現力

２　授業内容・研修内容

(1) 期　日　１月24日(火)

(2) 会　場　北海道静内農業高等学校　体育館

(3) 参加者　食品科学科２学年17名，食品科学科３学年24名

(4) 講　師　株式会社ＴＡＩＳＨＩディレクター　嶋田　健一　様

(5) 概　要　地域と協働で開発してきた特産品の試食会を，新ひだか町役場や関係機関と合同で行い，今後より良い特産品開発になるよう写真68のように意見交換を行った。

３　２学年の感想

(1) 今までの学習をとおして，商品を１から考え，開発する知識が身に付きました。

(2) 自分達で何かを創り上げることは大変ですが，多くの力が身に付いたと思います。

(3) どんな人に向けて作るのか，何のために作るのかを明確にしておくことが，商品開発ではとても重要だということを学ぶことができました。

４　３学年の感想

(1) 色々な材料を使ってどんな味にしていくか，決めるのがとても大変でしたが，事業者さんが作るまでたどり着くことができて良かったです。

(2) 班長としてみんなの意見をまとめ，それを形にすることは大変でしたが，一人には出来ない力なのでとても勉強になりました。

(3) 事業者さんに製造して頂いたものは，私達の想いを汲み取ってくれたものばかりで，とても嬉しい気持ちになりました。私達はこれで終わりですが，商品が売れて欲しいと思います。

５　成　　果

(1) 顧客の求めている価値やニーズを踏まえ，地域農畜産物を活用しながら特産品を開発していく難しさを生徒に理解させることができた。

(2) 新ひだか町役場や地域関連産業等と意見交換をしながら試食会を進めたことで，地域が求める特産品を生徒に理解させることができた。

(3) 生徒発案のアイディアが事業者での生産に生かされる学習をとおして，商品開発の手法を生徒に理解させることができた。

６　課　　題

(1) 生徒の意見の中に事業者とのやりとりを増やしたいという意見が見られたため，来年度は事業者とアイディア考案・試作等を行う時間を確保する必要がある。

(2) ３年生に対して，事業者が生産した商品を販売する機会を設けることが出来なかったため，商品企画から販売までの流れを学ばせることができるように授業計画を改善する必要がある。

(3) 市場のニーズを分析し，マーケットインの視点から商品の企画ができるようにするため，市場のデータの収集とそのデータの活用方法を生徒に指導する必要がある。

７　試食会参加者

団体等名	役職	氏名
新ひだか町	町長	大野　克之　様
新ひだか町	副町長	田中　伸幸　様
新ひだか町	総務部長	柴田　　隆　様
一般社団法人新ひだか観光協会	事務局長	下条道　寿　様
新ひだか町商工会	事務局長	渡辺　勝造　様
みついし農業協同組合	営農部長	三浦　直己　様
みついし農業協同組合	営農部長	丹野　潤一　様
有限会社あま屋	料理長	谷　　昇三　様
北海道クラフトビネガー株式会社	取締役社長	渡辺　英人　様
みついしょうじ株式会社	ふるさと納税担当	石丸　理佳　様
みついしょうじ株式会社	ふるさと納税担当	澤田　咲季　様
新ひだか町	課長	中村　英貴　様
新ひだか町	主幹	平田　明浩　様
新ひだか町	主事	井上　和哉　様
株式会社ＴＡＩＳＨＩ	代表取締役	菅野　　剛　様
株式会社ＴＡＩＳＨＩ	ディレクター	嶋田　健一　様

写真68　「試作品の評価と試食会」の授業の様子

Ⅷ－９　販売活動（東京グルメ＆ダイニングスタイルショー）

１　目　　的

(1) ねらい　開発した商品を地域の特産品として，企業と連携しながら販売活動を実践することができるよう指導する。

(2) 身に付けさせたい資質・能力　　◎実践力　○表現力

２　授業内容・研修内容

(1) 期　日　２月15日（水）～２月17日（金）

(2) 会　場　国際展示場（東京ビッグサイト）東棟６ブース

(3) 参加者　食品科学科２学年５名

(4) 運　営　東京グルメ＆ダイニングスタイルショー運営事務局

(5) 概　要　日本最大級の商談会で，高級食材店・外食産業・酒販店・ホテル・旅館などを始めとする多くのバイヤーに，地域と協働で開発してきた特産品を，新ひだか町役場や関係機関と合同で商談活動を写真69のように行った。３日間の商談活動をとおして，20社以上の企業に興味を持って頂くことができた。

３　感　　想

(1) 自分達が開発してきた商品を実際にバイヤーに取り扱って貰うためには，どのような言葉を使えば良いのか考えることが難しかったけど，日に日に説明やＰＲができるようになりました。

(2) 自分達が開発してきた商品が，道外の方々に認められたことで，次年度もっと頑張ろうと思いました。

(3) 人が途切れることなくブースにバイヤーが来てくれ，たくさん話せたことで，モノの売り方には色々な方法があることを学ぶことが出来ました。

4　成　　果

(1) 日本最大の商談会で，多くのバイヤーと話す機会が得られたことで，企業が求める商品を生徒に理解させることができた。

(2) イベントに出展する道外の事業者の特産品等を知ることができたことで，生徒に地域の資源について理解させることができた。

(3) 地域事業者と共に商談活動を行うことで，商談するための言葉使いや実践的なＰＲ方法の技術を，生徒に身に付けさせることができた。

5　課　　題

(1) 参加人数が５名と限られたため，次年度は北海道で開催される商談会への参加やオンラインでつなぐ等，生徒全員が学ぶことができる機会を設ける必要がある。

(2) どのようなバイヤーへ繋ぎたいのか，参加出来なかった事業者と事前に打ち合わせをすることができなかったため，次年度は事前に事業者と生徒が打合せをした上で参加する必要がある。

(3) イベントに出展する道外の事業者と話す機会を設けることができなかったため，次年度は参加する事業者と話す機会を設け，商品開発の学びを深められるよう，生徒へ事前に指導する必要がある。

写真69　「試作品の評価と試食会」の販売活動の様子

Ⅷ-10　eコマース

1　目　　的

農業分野において，インターネットを事業に活用し地域で活躍できるデジタル人材を育成するため，ヤフー株式会社の通販サイトを通じて，ふるさと「新ひだか町」の特産物や本校の学校農場生産品等の情報発信や販売の方法を学ばせる実践的教育に取り組み，地域に先駆けたビジネスモデルを創り出すとともに新ひだか町経済の活性化を図るよう指導する。

2　対象生徒　食品科学科２年生17名，生産科学科２年生23名

3　プログラムの開発と実践

１年間の学習プログラムは，ヤフー株式会社ＳＲ推進統括本部の皆様と連携し立案した。実際の指導に当たっては，ヤフー株式会社ＳＲ推進統括本部と連携し授業の計画を立案し，写真70のように本校教諭が指導した。

4　授業内容・研修内容

回･日時	講師，授業者	内　　容	身につけさせたい資質，能力
第１回目 ６月16日(木)	ヤフー株式会社 SR推進統括本部 旭　慎太郎　様	「オリエンテーション」 ・講話(ｅコマースについて講師より講話) ・グループ活動①(チーム力を高める演習) ・グループ活動②(ＥＣ管理ツールに関する演習)	◎思考力 ○判断力
第２回目 ６月28日(火) ７月８日(金)	教諭　田中　彩佳 教諭　三浦　創	「商品を理解する」生産者へインタビューをする。 ・グループ活動①(生産者について深く知る演習) ・グループ活動②(商品の質問事項を考える演習) ・グループ活動③(生産者から商品情報を聞く演習)	◎実践力 ○表現力
第３回目 ７月14日(木) ８月17日(水) ８月22日(月)	教諭　田中　彩佳 教諭　三浦　創	「写真撮影技術を学ぶ」 ・視聴(動画にて撮影技術の学習) ・グループ活動①(商品の写真構図を考える演習) ・グループ活動②(商品写真の撮影)	◎創造力 ○実践力

第４回目 ８月29日(月) ９月５日(月) ９月13日(火)	教諭　田中　彩佳 教諭　三浦　創	「消費者に伝わる文章を学ぶ」 ・グループ活動①(生産者から集めた情報を整理) ・グループ活動②(どう伝えるかをテーマに商品ページを作成する演習)	◎表現力 ○創造力
第５回目 ９月22日(木)	ヤフー株式会社 SR推進統括本部 旭　慎太郎　様 水上　哲也　様	「マーケティングを学ぶ」 ・講話(マーケティングについて講師より講話) ・グループ活動(ターゲティングを設定する演習)	◎表現力 ○創造力
第６回目 10月14日(金)	教諭　田中　彩佳 教諭　三浦　創	「作成内容を振り返る」 ・グループ活動(今までの学びから商品ページを振り返る演習)	◎創造力 ○実践力
第７回目 10月24日(月) 11月７日(月)	教諭　田中　彩佳 教諭　三浦　創	「販売内容の最終確認をする」 ・グループ活動(作成した商品ページの見直し)	◎判断力 ○創造力
第８回目 12月５日(月) １月27日(火)	教諭　田中　彩佳 教諭　三浦　創	「成果をまとめる」 ・グループ活動(商品ページの閲覧数などの情報から今回学んだことをまとめる)	◎判断力 ○創造力
第９回目 ２月７日(木)	ヤフー株式会社 SR推進統括本部 旭　慎太郎　様	「成果発表」 ・各班学んだ成果をまとめたものを発表し，講師より講評をもらう。	◎表現力 ○実践力

５　感想

(1) 文字で相手に伝えることの大変さを学びました。

(2) サイトを見てもらうためには，漢字ばかりを使うのではなく，ひらがなやカタカナなどを使い，どのような検索の仕方でもヒットしやすいように細かな仕掛けをする事が大切だということがわかりました。

(3) グループで役割分担を決め活動することで，一人で悩むより課題を効率よく解決していけることがわかりました。

(4) 普段ＳＮＳに使用する写真を撮るので写真撮影は簡単だと思っていましたが，商品の良さを引き出すために撮る写真は角度に気をつけたりと簡単ではないことを知ることができました。

(5) 他の班の発表を見ていると，自分たちの班と力を入れる部分が違いとても参考になりました。

(6) 普段インターネットで買い物をするときにページをくまなく確認することはありませんでした。ですが，商品ページを１つ作るだけなら簡単ですが，その商品を見えない相手に伝えるためのページを作るためには，さまざまな工夫が必要なことがわかりました。

６　成　　果

(1) インターネットショッピングサイトを活用した商取引について，実践的な技術を生徒に身に付けさせることができた。

(2) 新ひだか町観光協会と連携したショッピングサイトを運営できたことにより，地域資源の魅力を生徒に発見させることができた。

(3) チームで課題に取り組む姿勢や態度，取り組んだあとの成果を生徒に感じさせることができ，協働して取り組むことの大切さを生徒に理解させることができた。

７　課　　題

(1) 商品アイテム数を増やし，１商品に対して取り組む生徒人数の調整の必要がある。

(2) 学習成果が継続して発揮できるよう，新ひだか町観光協会と連携を密にし，インターネットショッピングサイトを継続的に運営できるように取り組む必要がある。

(3) 地域資源の魅力を更に深く理解できるよう，他の科目と学習内容を整理し指導を進める必要がある。

写真70　「eコマース」の授業の様子

第９節　遠隔システムを活用した海外の学校との交流

Ⅸ－１　海外の農業高校の生徒との交流　日本の農業(文化)を伝える

１　目　　的

(1) ねらい　生徒が英語に触れる機会を充実させ,授業を実際のコミュニケーションの場面をとおして,農業科で学んでいる知識を身に付けるように指導する。

(2) 身に付けさせたい資質・能力　　○思考力　◎表現力

２　授業内容・研修内容

(1) 期　日　令和４年６月18日(土)～７月20日(水)

(2) 会　場　北海道静内農業高等学校

(3) 参加者　食品科学科・生産科学科全学年141名

(4) 概　要　昨年度から日仏農業教育連携事業の一環として交流をしてきたフランスのLycée les Vergers(ヴェルジェ高校)から２名の留学生を受け入れ，本校の生徒と授業や実習，学校行事をとおして写真71のように交流を行った。

(5) 詳　細

ア　経　　緯　農林水産省日仏農業教育連携事業で交流相手校となった,Lycée les Vergersと昨年度来，本校３年生の全生徒がオンライン上でのコミュニケーションを図ってきた。令和３年12月に在フランス日本大使館を通じて，本校への訪問を希望する生徒がいる旨の連絡があり，受け入れの可否を含めた検討を開始した。

イ　入国手続　新型コロナウイルス感染症の流行による渡航に関する様々な制約のほか，先方から依頼のあった期間が１か月間と比較的長い期間であること，留学生の受け入れ先，経費に係る事柄について懸念がなされた。入国検疫上の条件が刻々と変わる中ではあったが，在留管理庁に確認したところ，本留学生には一定の条件のもとに短期滞在許可の在留資格が発給される可能性があるとのことで，１つ目のハードル通過の見通しを付けることができた。

ウ　受け入れ　留学生受け入れ先の確保については，マイスターハイスクール事業を通じて地元の関係団体から静内インターナショナルクラブ(ＳＩＣ)の紹介を受けた。ＳＩＣは，新ひだか町の姉妹都市であるアメリカ・ケンタッキー州のレキシントン市との交流を中心的に担っており，国際交流のノウハウ蓄積があり，フランス人留学生受け入れに関してもご理解を示していただいた。本事業についてはＳＩＣ副代表の谷岡牧場様において１か月間インターンシップとホームステイを受け入れていただいた。

エ　交流事業　留学生は滞在先牧場でのインターンシップと本校での留学を主な目的としたが，国際交流事業をとおして地元地域との連携強化を図るために様々な交流イベントを企画した。主な日程は次のとおり。

日　　付	内　　容
６月18日(土)	到着(羽田経由―新千歳)
６月20日(月)	高校訪問・打ち合わせ
６月21日(火)	新ひだか町長表敬訪問
６月19日(日)～26日(日)	牧場・農業インターンシップ
６月27日(月)～７月５日(火)	高校留学"La Semaine de France"(フランス週間)
６月27日(月)	静内農業高校全校歓迎会(All Englishにて実施)
６月28日(火)	英語科・家庭科・馬事コース教科連携授業
６月29日(水)	桜丘小学校児童との日仏交流
７月３日(日)	静内農業高校で送別会(フェアウェル)
７月６日(水)	静内ロータリークラブ歓迎会
７月６日(水)～19日(火)	牧場・農業インターンシップ
７月11日(月)	高静小学校児童との日仏交流
７月13日(水)	北海道大学静内研究牧場視察
７月20日(水)	帰国(新千歳―羽田経由)

３　生徒の感想

(1) 馬のセリに一緒に行ったり，朝学習を一緒にやったりと必ず話せるチャンスがあったことが良かった。そして，英語の授業で本物のフランス語を聞けて感動しました。

(2) フランス語には男性形とか女性形があるということを聞いて複雑そうだけど面白くて，自分の知らない外国語や話している人達たちの文化に興味を持つことができました。

(3) 英語が苦手でスマホアプリを使って話していましたが，英語ができたらもっとお互いを知る事ができたのかなと後悔しました。連絡先を交換し，放課後に遊んだら英語がわからなくても意外に話が通じて，とても笑いました。

４　成　　果

(1) 国際交流を軸とした英語教育の充実に関して，留学生を招へいすることで，英語の得手不得手にかかわらず多くの在校生にとって刺激となり，生徒に異文化や言語への関心を高めさせることができた。

(2) 地域の各種関連団体や牧場，自治体，小学校などとの連携・協力があり，単なる留学生訪問にとどまることなく，今後の本校英語教育を進めていく上での関係機関との連携体制を構築することができた。

(3) 日仏農業教育連携事業での留学生受け入れは国内で初めての取り組みとなり，様々な場所で本校生徒の活動が評価されることにもつながった。また，令和５年２月には農林水産省のフランス訪問プロジェクトに本校生徒３名が選ばれ，リヨン市にて農業高校訪問やワイナリー・農場見学，ホームステイなどを通じて，日仏両国の生徒同士の交流を深めるとともに，現地の日本食普及イベント等へ生徒に参加させることができた。

５　課　　題

(1) 留学生の受け入れプログラムは特に地域の方々のボランティア精神あふれる善意により実現できたところが大きい。特に，事業計画を立案後に受け入れを快諾いただき，１か月にわたり滞在のホストファミリーとして谷岡牧場様にはご負担をおかけした。事業継続性を見据え，新ひだか町の姉妹都市交流委員会を通じて協力を募るといった幅広い呼びかけが必要である。

(2) 特に海外学校との事業実施は，既定の制度で十分対応しきれないことがあり，関係諸機関との密な連携の上，合理的な配慮と柔軟な対応に関しての教職員の理解が必要である。

(3) ヴェルジェ高校は今年度以降の教職員・生徒の移動を含む交流を希望しているため，分掌に位置付ける等，学校としての受け入れ体制を整備する必要がある。

写真71「海外の農業高校の生徒との交流　日本の農業(文化)を伝える」の交流の様子

Ⅸ-２　遠隔システムを活用した海外の学校との交流

１　目　　的

(1) ねらい　生徒が英語に触れる機会を充実させ，実際に役立つ英語によるコミュニケーション能力を身に付けるように指導する。

(2) 身に付けさせたい資質・能力　　〇思考力　〇表現力　◎実践力

２　授業内容・研修内容

(1) 期　日　令和４年４月から毎月１回程度の交流を随時実施

(2) 方　法　オンライン(教育用動画共有サービスflip)

(3) 相手校　LaFayette High School（アメリカ・ケンタッキー州）
Lycée les Vergers　（フランス・イル＝エ＝ヴィレーヌ県）
James Ruse Agricultural High school　（オーストラリア・ニューサウスウェールズ州）

(4) 参加者　食品科学科・生産科学科全学年141名

(5) 概　要　本校の所在地である,新ひだか町の姉妹都市レキシントン市のLaFayette High Schoolで日本語を履修する生徒と英語および日本語を用いた写真72のように交流を行った。本校生徒１名に対して，相手校の生徒１名を基本のペアとし，身の回りのことや学校生活など様々なトピックについて話し合った。フランスのLycée les Vergersにあっては日仏農業教育連携事業の枠組みを活用し，農業分野での交流もテーマとした授業を実施した。なお，交流相手校のうち，アメリカのLaFayette High Schoolは昨年，オーストラリア・ニューサウスウェールズ州にあるJames Ruse Agricultural High schoolはオーストラリアで名門に数えられる農業高校であり，本校英語科において今年度新たに開拓した。

３　生徒の感想

(1) 新しい刺激があり，英語をもっと話せるようになりたいと思うようになり，英語を勉強する力になったと思う。

(2) もちろん英語をもっと勉強して話せるようになりたいけど，コミュニケーションで大事なことは，笑顔とか伝えようとすることでなんだかんだ伝わるんだ！と感じた。

(3) 交流している相手校から留学生も来日して，国際交流にとても興味がわきました。私も海外に行ってみたいと思うようになりました。

４　成　　果

(1) 昨年度から継続して交流している２学年では，導入当初に比べ，英語を話したり動画を撮影したり

することに慣れ，コミュニケーションそのものに楽しみを見出す喜びを生徒に体験させることができた。
(2) 昨年度の状況を相手校の担当者と振り返り，交流テーマの設定や生徒の状況についてオンラインミーティングを通じて共有し改善することにより，活発な交流活動を生徒に体験させることができた。
(3) 海外の文化や人々に触れ，生徒たちが普段意識することの少ない「外の世界」について生徒に感じる機会を増やすことができた。また，様々な国際交流の事業に興味を持ち積極的に生徒に取り組ませることができた。

５　課　　題

(1) 昨年度の反省をふまえ,本校と相手校の負担を軽減するため交流の回数を月１回程度に削減したが，生徒の中にはもっと交流の頻度を増やしてもらいたいと考える者もいたため，交流頻度や方法について再考及び改善していく必要がある。
(2) オーストラリアの高校は日本との時差が少ないことから，ライブ接続によるオンライン交流授業を次年度から実施できるように相手校と調整を行う必要がある。
(3) 生徒が自らの考えを自由に表現することでコミュニケーションを活発にすることができるように，汎用性の高い英語表現や相手校の生徒がよく使う語彙をさらに強化して身に付けさせていく必要がある。

写真72「遠隔システムを活用した海外の学校との交流」の授業の様子

Ⅸ-３　英語を通じたコミュニケーション　(Englih Salon)

１　目　　的

(1) ねらい　授業以外の場面でリラックスした雰囲気で英語を通じたコミュニケーションをとり，英語でコミュニケーションをとる姿勢を身に付けるように指導する。
(2) 身に付けさせたい資質・能力　　○表現力　◎実践力

２　授業内容・研修内容

(1) 期　日　令和４年６月１日(水)～令和５年３月31日(金)のＡＬＴ来校日
(2) 会　場　北海道静内農業高等学校　図書室
(3) 参加者　食品科学科・生産科学科全学年希望者
(4) 講　師　ルーカス・シヴァン，センカリ・ウィリアムズ
(5) 概　要　ＡＬＴと気軽に英語でコミュニケーションをとることができる空間の中で，日常会話で使われる表現や英語の独特な言い回し，文化等を写真73のように学習した。

３　生徒の感想

(1) 今まで授業以外にＡＬＴの先生と関わることがあまりなかったので，Englih Salonで沢山話すことができて嬉しかったです。
(2) ＡＬＴの先生とお話する中で，初めて知った英語の面白い表現や文化を学ぶことができてとても勉強になりました。また先生とお話しするのが楽しみです。
(3) 話したいことがあっても英語でそれをどう言えばいいのかわからないことがあり，もっと英語を勉強しようと思いました。

４　成　　果

(1) 生の英語に触れ，自発的に英語で会話をする機会を増やし生徒の英会話技能を高めることができた
(2) ＡＬＴとのコミュニケーションを通して，日本と海外の文化や価値観の違い等を生徒に理解させることができた。
(3) 日常会話で使用される語彙や表現を生徒に身に付けさせることができた。

５　課　　題

(1) より多くの生徒がEnglih Salonに参加し，英語や英語圏に興味を持ち，自らの視野を広げていくことができるよう，活動の周知を工夫していく必要がある。
(2) 会話活動を通して生徒がより深い学びを得ることができるよう，内容の改善・充実を図る必要がある。
(3) Englih Salonで学んだ事と普段の授業の学びが有機的に結びつくよう，ＡＬＴとの連携をより深めていく必要がある。

写真73　「英語を通じたコミュニケーション　(Englih Salon)」の交流の様子

第10節　キャリア・パスポートの活用（指定期間において継続して活用）

Ｘ－１　キャリア・パスポートの活用（指定期間において継続して活用）に関する取組

１　目　　的

(1) ねらい　キャリア・パスポートへの取り組みを通して，自己の変化や成長を自分の目で見て気づくことができるようにするとともに，自分の将来や働きたい仕事について主体的に考えられるように指導する。

(2) 身に付けさせたい資質・能力　　◎思考力　○表現力

２　授業内容

(1) 期　日　令和４年４月８日(金)～令和５年３月24日(金)

(2) 場　所　北海道静内農業高等学校

(3) 参加者　食品科学科・生産科学科全学年139名

(4) 概　要　国立教育政策研究所が示したキャリア・パスポートを参考に本校の書式を作成し，生徒自身が高校生活の学びとキャリア形成の関係性について見通しを持って生活できるように写真74のように学習した。

３　生徒の感想

(1) これまでの学習の振り返りを元に，次の目標を決める機会となり良かった。

(2) 振り返る機会ができて良い，改めて書くことの大切さを学べて良かった。

(3) 進路実現に向けて，落ち着いて考える機会ができたので，良かった。

４　成　　果

(1) １年生では，将来を見据えた目標設定することの大切さを生徒に理解させることができた。

(2) ２年生では，自分自身の振り返りとともに，高校生活で学ぶべきことや将来に向けたキャリア形成の考え方を生徒に理解させることができた。

(3) ３年生では，自己理解を高め，将来の進路を考える資料として生徒に活用させることができた。

５　課　　題

(1) １年生は，書く内容を自分で考えることができない生徒もいた。また、取り組みやすい書式の研究と指導方法の改善が必要である。

(2) ２年生は，自分自身が成長できていないことに気づいてもそのままで過ごしてしまうことや，就きたい仕事が明確にならなくて悩んでしまうなどがあるため，担任が中心となって生徒の進路相談に対応するための体制づくりなどが必要である。

(3) ３年生は，進路活動の際に自己理解や志望理由を文章でまとめるための有効な手段として活用していくことを習慣として定着させる必要がある。

写真74　「キャリア・パスポート」の記入に取り組む様子

Ｘ－２　上級学校を知る

１　目　　的

(1) ねらい　農業に関する実践的な学習活動を行うため，大学及び農業大学校などと連携を図り，地域における産業の実態を把握し，今後の在り方を考察することができるよう指導する。

(2) 身に付けさせたい資質・能力　　◎実践力　○想像力

２　授業内容・研修内容

(1) 期　日　11月２日(水)

(2) 会　場　北海道大学農学部キャンパス

(3) 参加者　食品科学科１学年21名，生産科学科１学年38名　計59名

(4) 講　師　北海道大学大学院農学研究院　地域連携経済学研究室　准教授　小林　国之　様
　　北海道大学大学院農学研究院　食品栄養学研究室　　教授　　石塚　　敏　様
　　北海道大学大学院農学研究院　園芸研究室　　講師　　実山　　豊　様

(5) 概　要　大学の概要について説明を受け，学科別に模擬授業を写真75のように受講した。その後，研究室を見学し大学院生とフリートークを行った。バスによるキャンパス見学では小林准教授から説明を受けた。模擬授業の内容は次の通り。

・食品科学科　「未病の成り立ちを考える　－食べ物で予防できる病気の芽－」
　教授　石塚　　敏　様
・生産科学科　「究極の持続的農法，自然栽培の畑にて」
　講師　実山　　豊　様

３　生徒の感想

(1) 初めての大学視察でしたが，大学ではどのような学習ができ，どのような研究をしているのかがわかりました。

(2) 大学生の皆さんと交流する中で，高校生のうちに身に付けた方が良いこと，挑戦した方が良いことがわかりました。

(3) 私は将来大学進学を目指しているので，今回の模擬授業や研究内容の紹介はとても勉強になりました。難しい部分もありましたが，今後もっと勉強して理解できるようになりたいと思いました。

４　成　　果

(1) 学内や研究室の見学，模擬授業をとおして，大学の概要や農学部の研究内容について生徒に理解させることができた。

(2) 大学院生との交流をとおして，卒業後のキャリア形成について生徒に考えさせることができた。

(3) 最新の研究内容や設備を見学したことで，今後のプロジェクト学習に繋がる内容を生徒に理解させることができた。

５　課　　題

(1) 視察の効果を高めるため，大学で学ぶことの意義や大学の歴史等に関する事前学習を行う必要がある。

(2) 進路意識をより高めるため，自己のキャリアプランニングについて事前に十分考えて視察に望むよう，進路指導部と連携し事前指導を行う必要がある。

(3) 生徒のよりよい進路選択を構築するため，進路活動に生かせるポートフォリオを作成していく必要がある。

写真75　「上級学校を知る」の授業の様子

Ｘ－３　実用英語技能検定等に関する対策

１　目　　的

(1) ねらい　資格取得を目標とした英語学習を通じて，言語運用能力を育成し，実践的な英語力を身に付けるように指導する。

(2) 身に付けさせたい資質・能力　　◎実践力　○表現力

２　授業内容・研修内容

(1) 期　日　令和４年４月１日(金)～令和５年３月31日(金)

(2) 会　場　北海道静内農業高等学校

(3) 参加者　食品科学科・生産科学科全学年希望者

(4) 担　当　北海道静内農業高等学校英語科教員

(5) 概　要　実用英語技能検定に向けて，受験希望者に対して写真76のように課外学習を実施した。

３　生徒の感想

(1) 過去問や問題集を解くことで，自分の苦手な部分と得意な部分がわかり，効率的に勉強することができました。

(2) 事前に対策をしたことで試験に対する不安が和らぎ,自信を持って試験を受けることができました。

(3) 検定の勉強をしたことで，普段の授業の内容への理解が深まりました。

４　成　　果

(1) 試験対策や学習方法などについての指導を通して,試験に対する生徒の理解を深めることができた。

(2) 検定に向けた学習や受検を通して語彙や使用頻度の高い表現等を生徒に身に付けさせることができた。

(3) 検定に向けた学習や受検を通して，学習する習慣を生徒に身に付けさせることができた。

５　課　　題

(1) より多くの生徒が検定を受検し，学力を伸ばしていくことができるよう，案内の方法や指導内容の改善，工夫をしていく必要がある。

(2) 各生徒が目標とする級に合格することができるよう，普段の授業においても語彙や表現についての指導をわかりやすく，より理解が深まるかたちで行っていく必要がある。

(3) 作文や二次の英語での面接をクリアできるよう，指導を充実させていく必要がある。

写真76　「実用英語技能検定等に関する対策」の授業の様子

Ｘ－４　食品表示に関する検定対策

１　目　　的

(1) ねらい　課題を解決する力の向上を目指して自ら学び，農業の創造と発展に主体的かつ協働的に取り組む態度を身に付けるよう指導する。

(2) 身に付けさせたい資質・能力　　◎実践力　○判断力

２　授業内容・研修内容

回･日時･場所	参加者	講　　師	概　　要
第１回目 11月8日(火) 特別教室４ (オンライン)	食品科学科 ３学年２名 ２学年１名	国分北海道株式会社 人事総務部主任 松本　智貴　様	食品表示検定を受験する生徒に対し，模擬問題を作成していただき，模擬試験問題のポイントを写真77のように学習した。
第２回目 11月9日(水) 特別教室４ (オンライン)	食品科学科 ３学年３名	国分北海道株式会社 人事総務部主任 松本　智貴　様	食品表示検定を受験する生徒に対し，模擬問題を作成していただき，模擬試験問題のポイントを写真77のように学習した。

３　２学年の感想

(1) 勉強していてわからない事があったり，不安なこともたくさんあったので専門家の人からアドバイスをもらえたり，わからない事をすぐに教えてもらえてよかったです。

４　３学年の感想

(1) テキストではわからない事があったので，専門家の人に話を聞けて良かったです。

(2) いただいた模擬問題は思ったよりも難しくて，受験日までにしっかり勉強しないといけないと改めて思いました。

５　成　　果

(1) 外部講師より直接ご指導いただいたことで，資格取得に向けた生徒の意欲を向上させることができた。

(2) 法律に関する細かい訂正部分などを，具体的にわかりやすく説明いただけたことで，生徒に問題に取り組む姿勢を理解させることができた。

６　課　　題

(1) 検定への受験者を増やすため，検定内容を食品流通の授業に組み込む必要がある。

(2) 検定受検者は希望生徒のみの参加としたため，来年度は放課後実習の時間を活用し３学年全員に受検させる計画を立てる必要がある。

写真77　「食品表示に関する検定対策」の授業の様子

第11節　教育課程の刷新の方向性を検討・改善（次年度，学校設定科目を設定）

Ⅺ－１　教育課程委員会の実施状況

教育課程委員会を８回開催し，教育課程編成に取り組んだ。各学科の教育内容を明確化するとともに，獣医師志望者や４年生大学志望者の対応などについて協議した。開催内容は次のとおりである。

回	日　　時	内　　容
1	５月12日（木）	・マイスター・ハイスクール事業における課題の明確化 ・単元配列表の作成について
2	６月14日（火）	・単元配列表と教科横断的な学習について（校内研修）
3	７月６日（水）	・教科横断的な授業の実践に向けた情報の共有について
4	９月22日（木）	・教科横断的な授業の実践に向けた進捗状況の確認 ・令和５年度，令和６年度の教育課程編成の方針について ・獣医師，４年制大学進学希望者への対応
5	11月25日（金）	・令和５年度，令和６年度の教育課程編成の方針について ・獣医師，４年制大学進学希望者への対応
6	12月９日（金）	・各教科，学科における育てる生徒像に対する教育内容の検討について ・選択科目の配置に関する意見交換
7	１月19日（木）	・各教科，学科における育てる生徒像に対する教育内容の確認 ・教科主任からの要望とりまとめ ・教科，学科会議における専門科目の選定について
8	２月７日（火）	・令和５年度の教育課程の最終確認 ・令和６年度教育課程の検討について

Ⅺ－２　令和５年度入学生教育課程について

１　令和５年度入学生教育課程における改善事項

第１学年，第２学年において学校設定科目「応用英語」１単位，「応用数学」（１単位）を選択科目として設定する。獣医師志望者や４年制大学志望者に対する学習を強化することを目的とし，長期休業を活用した集中授業として実施する。

２　令和５年度学年別教育課程について

第１学年，第２学年において学校設定科目「応用英語」１単位，「応用数学」（１単位）を選択科目として設定する。獣医師志望者や４年制大学志望者に対する学習を強化することを目的とし，長期休業を活用した集中授業として実施する。